

28Q-am088

実務経験を有する受験生を含めた OSCE トライアルの運用及び課題評価

○池田 賢二¹, 名徳 倫明¹, 初田 泰敏¹, 伊賀 幾美¹, 川西 園代¹, 山形 雅代¹,
上島 秀樹¹, 小西 廣己¹, 廣谷 芳彦¹, 小川 雅史¹(¹大阪大谷大薬)

【目的】大阪大谷大学薬学部では、平成19及び20年度に全課題でOSCEトライアルを開催した。本学では平成20年度現在、薬学部3回生が最高学年であるため受験生を他大学から招聘した。このため、実務経験を有する受験生（実有受験生）を含めた運用評価が可能となり、課題評価の評価者間による変動を、実務経験の有無において比較検討したので運用形式と共に報告する。【方法】受験生数は、平成20年度24名であり、実有受験生である大学院生は8名であった。トライアル方式は全受験生が同一課題から始まるストレート方式とした。また、OSCEを想定して8レーンの運用を検証するために、受験生動線の移動のみを行う受験生を4レーン24名導入した。今回、各種の薬剤の調製課題に使用可能な移動式調剤台（小西医療器、大阪）を初めて配備した。課題毎に試技良好な評価項目を全項目数に対して百分率（良好%）で集計し、2人の評価者間での差異と全体的な評価値間で相関性の有無を検討した。【結果および考察】ストレート方式は、ローテーション方式に比べて1.6倍程度の時間を要するが、受験生動線が一方向である点、実施場所を重複利用できる点、スタッフ人数を節約できる点から有益であると考えられる。移動式調剤台は、OSCE試技に適正に使用でき、数種の課題に重複利用できる点で有用であった。良好%は実務経験の無い受験生（実無受験生）の場合、実有受験生より評価者間の変動が認められた。また、全体的高評価である受験生において、良好%の評価者間の差異が10%以上である割合は、実有受験生の7%に対して実無受験生では25%と高い傾向があった。これは全体的に高評価であっても、項目毎の不良評価を見逃している可能性を示唆し、評価者間の基準統一をより一層確認していく必要があると考えられる。